

第2巻第1号
通巻第37号

杉並ステイトへの道

世界でも、あるいは、日本国内でも、あるいはあまり知られていないかもしれないが、杉並区は東京特別区という枠を超え、独立した州への道を模索しているようである。その第一歩がレジ袋税。東高円寺の住人が、区境を一步踏み越えて中野区で購入すれば無用の税。杉並よ。

区内のすべての店舗でいわゆるコンビニやスーパーのあの白い袋に料金がかかるようになる。国民総背番号制の導入に反対しているのも独立した州をめざすことがその背景にあると噂されている。どこへ行く、杉並区



発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 ☎166-0015 からす新聞本社

からすホームページ <http://www.go-karasu.com/> 投書・お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

バンドで演奏するという形態で音楽を生業として
いる人物がいたでしょう。この人をあなたは何と呼
ぶか。私ならバンドマンと呼びたいと思うが、昨今
ではこういう人をミュージシャンとかアーティスト
トと称するのが一般的なようである。まあ、呼称が
なんであるとも、やっている中味に変わりはない
わけで、当人にとってはどうでもよいことかもしれ
ない。もちろん、逆に、非常に重要な問題である可
能性だってあるけれども、「肩書きなどないまま
良いのさ/何にもなりたくない」と唄っていたバン
ドもあるぐらいで、大事なはその中味たる音楽そ
のものであることはまちがいない(と祈る)。

私もりも些か年上の世代では、エレキを抱えてバ
ンドをやるなんざ、それはもう不良でしかない、と
いう認識が一般的だった(ようである)。私が中学
生や高校生だったときにはそんな風潮も幾分おさま
りかけてきていたものの、エレキたるもの、あまり
歓迎されたものでなかったことは確かである。そも
そも、ロックというものは、発生当初から少なから
ず不良っぽい音楽の代名詞のように思われていたも
のなのだ。そんな環境下で育った私の中には、バン
ドマンとは斯くあるべし、というような歪んだイ
メージが形成された、バンドやるにはちょっと悪い
ぐらいでないといけない、というような。そのおかげ
で、吸いたくもない煙草を吸い、飲みたくもない
酒を飲み、乗りたくもない単車に乗り、したくもな
い喧嘩をして、夜遊びして、行方不明になって、警
察の厄介になり……と、段々話がどこへ行ってしま
うのかわからなくなってきたのでこの辺りでやめる

けれども、とにもかくにも、バンドマンとはそう
いったものだと思いついていた部分がない。
常々、固着観念(あるいは、既成概念というべき
か)に縛られてはいけけないのだ、と喧伝しているし、
自戒しているつもりなのだが、バンドマンの例に限
らず、ふと考えると妙なところで縛られている自分
に気づくことがある。味噌汁の具は多くてはいけな
い、そういう全くどうでもよいような。味噌汁とい
うからには汁が主体でなくてはいいけない、という、
いつの間にか形成されてしまった単なる思い込みで
しかないのだが、私としては妙にひっかかるもので
あり、出てきたものが具沢山で汁が少なかつたりす
ると、気分が悪いのである。ばかだろうか。正しく、
ばかである。

四十年に渡って私の食事の面倒をみている母親
は、そのことを熟知していて、平生は私の分だけは
具を少なくするという配慮をしてくれているのだが、
どたばたしていたりすると、うっかり具沢山の味噌
汁が出てきてしまうことがある。私の如き者が母親
様ともあろう方に不平を申し上げるのは如何がなも
のか、とも思われるものの、ついついほろりと「具
が多い」などと愚痴っぽく零してしまったりするこ
ともなくはない。そんな言葉を小耳に挟もうものな
ら「あんたみたいに不規則な生活して煙草ばっかり
吸っている人間はビタミン取んないや駄目なのよ」
などと、脈絡のよくわからない説教が始まってし
(最終面に続く)

今日の紙面から

- 二面(ソウル・国際面)
- 松本と話そうピンポンパン
- ロンドンレポート
- 三面(芸術面)
- レイズギャラリー
- 四・五面(からすライブラリー)
- 本『愚の旗』
- 映画『D.D. Is This It』
- 映画『トクメ』
- 六・七面(文芸面)
- MLBの庭

からす新聞は××××
が母体となつて、世界に文
化と芸術を発信すべく発行
しています。
誰でも自由に参加できま
す(無茶じゃない範囲で)。

松本と話そつピンポンパン

この間「いいとも」を見ていたらミスチルの桜井が出ていて、身体を鍛えるのにはまってる、どこまでも追い込んで鍛える、そのときに自分はなんでこんなミュージシャンみたいな甘つちよりのことをやってんのだろうか、どうしてアスリートにならなかつたのだろうか、イチローのインタビューを読んだらと共鳴する、と言っていた。

実は白状すると、自分も、今度生まれ変わるとすればアスリートでありたいなどと思うようになった、究極の状態、ギリギリまで自らを追い詰める、そこには勝つか負けるかというとても分かりやすい結果しがなく、リアルな自分しかない、そこに生の真実があるのではないかと。

この間、新年ということで久々に信頼している占師のところに立ち寄ったら目と目の間が広くなって、と言われ、海の近くにいることが関係しているのかもしれないと直感で反応すると、一種の座禅を組ん

だ瞑想状態に感じられる、といわれ、それもそのはずで、この一年半ほぼ毎日、約五キロ浜辺を走り、その際に身体を、海と風と太陽と江ノ島にさらし、心もそれらと一体化しているからだ、と思ったりした。

しばらく前までは身体と心は別のもので、心偏重で身体は舐めていて、そんなものにああだ、こうだ講釈垂れるのは日体大系の連中なんだろうとまで決めた、のだがこの有り様だ。

最近思うのだが、身体の細胞一個一個に意志があるのではないのか、脳細胞のみが意志を作り出しているというのは間違いではないのだろうか。

筋トレの際に自らが強化したい箇所があると、そこに物理的運動をさせると同時に意識も集中させなければならぬ、頭の中で、強くなっている、でかくなっている、とイメージしながらやるんだといわれているがそれはもう、筋細胞と脳細胞の気持ちのやり取りと言ってもいいんじゃないのか。

病は気から、というが、気は病からも真であらう。もう一つ白状すると、最近、睡眠薬や精神安定剤なしで眠れるようになった、が、前は心身の心と身のバランスが悪かった、どちらかにエネルギーが片寄り

夜の街／遊ぶ場所

また冬が来た。ここに着いたのが冬だったからか、何となく懐かしい感じだ。に加えて、冬の夜はけっこう好きなのだ。空気が澄んでいるからだろうか、看板や街灯、イルミネーションがいつもよりも綺麗に見える気がする。特に年が明ける前の雰囲気は何となく、暮れや師走と言った言葉がびびりたりな感じにせわしなく賑やかで好きなのだ。そんな訳で、友達との待ち合わせに夜に街に出て、時間まで少し街をうろついているだけで、ちよつと嬉しくなってしまう。暮れや師走なんて言葉から、そんな気持ちになるのは日本だけかもしれないと思っていたが、ロンドンでも日本とは少

し違う印象を受けながらニューイヤー前の雰囲気嬉しくなってしまった。

何処でも都会と言われる所はそうなんだろうが、ロンドンでもやはり夜の街だと思ってしまう。夜には夜の賑やかさ、世界がある。クラブ(ディスコ)も日本よりはるかに流行っていて、フアッシュョンや音楽の流行はこう言った所から発信されているんだらうと思ってしまう。ロンドンには日本よりも、クラブが流行る理由、夜遊びしやすい理由が有る。普通のクラブは夜の十一時を過ぎたい閉まってしまうのだ。法律でライセンスを持っていないと夜の十一時以降は酒が売れないからで、その後人々は遅くまでやっているバーやクラブなどに行く傾向がある。それに地下鉄が終わった後はナイトバスという便利なものが走っている、わざわざ高いタクシーを捕まえずに、寒い中バスなど待ちたくはないのだが。バスは一日中走っていて地下鉄用のトラベルカードを買えば(バス専用も有る)一日中バス、地下鉄は乗り放題で、電車が終わる時間帯になるとナイトバスがだいたい三十分一本の割合で走っているのだ。そんな

All We Need Is Love

過ぎていた、両者の意思疎通が欠けていた、に違はなく、今や快眠の日々であり、また、真夜中のいきなりのふくらむのコムラガエリもなくなり、自らの一体化を実感する。

心からの身体への反応は数多く体験してきた、が今は身体から心への反応を、寿命のほぼ半分に差し掛かろうとしている今、体験している。

イチローのあの全身から放たれるオーラは何ゆえなのか、分かっていた気分である。

な訳でここでは、足が無くたってタクシー代が無くたって夜に遊べてしまう。ひとくちにクラブと言っても色々有り、それぞれ場所の特徴を出して売っている、音楽の種類や、営業時間など様々である(中には朝の四時からオープンするところも)。場所によつては曜日によつて、音楽の傾向を変えたりしているところも有ったり、大きいフロアが有るクラブ、幾つかフロアが有る所、またラウンジバーとも言うのか、ディスコとバーの中間の様ところもある。一方、クラブの方はもう少し昼の街にも溶け込んでいて、庶民的な臭いがする。何処のクラブでも入口のカウンターが有りそこにビールを注ぐための蛇口の様なものが並んでいて、それぞれカウンターの外側から見えるようにビールのラベルが付いている。ハンバーガーやらチップスなど簡単な食事ができる所が多く、昼時には近所で働いているサラリーマンなどが食べに来ている。昼間から飲んでる人もけつこう多く、夕方には仕事が終わった後に仕事仲間と飲みに来る人達でこつた返している。どちらかと言うと気合いを入れて夜遊びに出掛けると言うよりは、もつと生活の一部になつていて、すぐく気

楽にちよつと一杯飲みに行く場所のようだ。

ところで、飲みに行く場所とは違つた遊び場所もある。カジノ。知り合いのチャイナ系マレーシア人が好きで良く行つていたので、何度か付いて行つた。奴が行く所は会員制で会員じゃない人も会員と一緒にあれば入れる。どう見てもアジア人の二人が行つても店員の態度がいいのには有り前ながらも少し驚いた。客層は幅広く、チャイニーズ又はチャイナ系、インド、アラブなどの中東系、イギリス人ではないヨーロッパ系、イギリス人と色々いる。まさしく、映画やテレビで観て知つていたあの世界で、初めて入つた時は「おお、これかあ」と感動した。ブラックジャック、ポーカー、ルーレットなどが有り、それぞれテーブルが幾つもある。チップは最低一枚五ポンド、(二ポンド一八〇〜一九〇円)ルーレットだけはレイトの低いチップが使われていた。その気になれば一〇〇ポンド負けるのは簡単である。中の飲み物や食べ物(サンドウィッチなど)タダで、チップとしてウエイトレスにチップ(カジノの)をあげていた。奴が一番好きだったのはブラックジャックで(自分もだが)中では一番運任せではないような気がする。にまつたつて勝つてようには出来ていないんだらうが、チャイナ訛りの英語で「ピクチャッ!」(ピクチャ、絵札の事だ)と叫んでいたのが、懐かしく感じられる。

そんな訳で色々遊ぶ場所は有るのだが、ただカフェに行くだけにしても夜の街中を歩いていると、ロンドンは夜の街だなあ、と感じてしまう。それに、冬がいい。暮れの賑やかさと夜の賑やかさがうまく混ざり合つて、僕を楽しい気分にするのである。

(神山)



アクアネット
Let's mind the harbour!

湊文社
SOBUNSHA

Rei's Gallery

お正月の間しばらく中野に帰ってました。
食っちゃ寝も飽きた頃、カメラを持って高円寺、吉祥寺辺りを散歩。
鶺鴒沼に住んだから、久々に中央線沿線を散歩すると空気の悪さに気づくけれど、逆にこの空気の悪さに落ちついてしまう。
プラプラ寒空の下を歩いて撮った写真と行った場所のイメージを元に作品にしました。

『マツ、カイダンデ、キミヲ』



『マデ、トオク、アルク』



『Is This It』

the Strokes

rough trade record, 2001年、

RTRADECD030



どちらかと聞かれれば、イギリスの音楽よりもアメリカの方が好きだと答えてしまふ。バンドよりもシンガー・ソングライターの方が好きだと答えるだろう。もちろんイギリスにも好きなミュージシャンは沢山いるし好きなバンドもあるのだが、その数がイギリスよりもアメリカ、バンドよりもソロ・ミュージシャンの方がどうしても多いのである。そう言う意味で、このバンドは僕にとって貴重なイギリス・バンドのお気に入りになった。同じレコード会社のお気に入りになった。同じレコード会社の違うバンドのCD(メロディ・ピーチズ)を買ったのが始まりで、そのホームページを見ていて視聴したのが初めてだった。何となくジャムに似てるな、初めて聞いたときにそう思い、けっこう良かったので買ってみた。CDを買ったその日に家に帰りCDを掛ける。全曲聞き終わり二週目を掛ける時には相当好きになっていた。久しぶりに元気のいいバンドに会った気がした。

何度も聞いても飽きが来ないのは何故だろうか。別に普通のバンドで、特別マニアックな事をやっている訳ではないし特別自分が好きなジャンルでもない。単純に曲がいいのだろう。加えて自分たちのやりたい音楽、音が実にうまくまとまっているアルバムの様な気がする。残念ながら歌詞カードが自分の買った物には付いていなかった。正確な歌詞は分からないが、歌詞も曲の雰囲気にもうまはまっている。後何年か早く出ていけばきつとトレインズポットにでも使われたに違いない。彼らの出現によって少しは自分の中の好み、アメリカ/イギリス、バンド/ソロのバランスが崩れたかもしれないと思つて、思い返してみた。ビートルズから始まりジャム、XTCなどなどきつとまだ沢山あるのだからイギリスとバンドという苦手な組み合わせでさえきつと有ることに気がついた。「そうか、自分はイギリス音楽もバンドもきつと好きだったんだなあ……」とストロークスを聞きながら気がついた時はちよつとおかしかったりさえた。すでに相当回数聞いているのだが、やっぱりまだ飽きてはいない。



(神山)

今でもこのCDを掛ける度に、僕の部屋をパンクなイギリスのお兄ちゃん達が元気に駆け抜けて行くの

『愚の旗』

竹内浩三

成星出版、1998年

ISBN4-916008-64-2



もう一五年以上前のこと、近所の大きな図書館で、偶然手に取った「恋人の眼やひよんと消ゆるや」という一冊の詩集。それが、竹内浩三の本だった。昭和二〇年、二三歳の若さでルソン島で戦死した、無名詩人だ。私は大体いわゆる詩人達の書く詩というものが、あまりよく分からない質で、当時それが密かにコンプレックスになっていた。自分が至らないせいだと思つていたような所もある。それでも、詩を書くのは好きだったから、何か自分に影響を与えてくれるような言葉を求めて、無闇に詩集をめくっては気持ちよくくじかれていたころだ。

とにかく、私は、生まれて初めて、何かにうたれて詩集から詩を書き出すというのをした。そして、それを声に出して読んで憶えるという事をした。「骨のうたう」と「演習」それに「雲」という三つの詩だった。どうしてその三つを選んだのかは憶えていないが、その時の自分に一番まつて入って来た作品だったからだろう。ここで紹介しているのかどうか分からないが、「骨のうたう」はこんな風にはじまる。

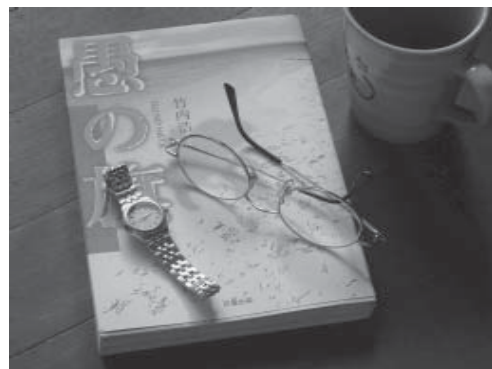
戦死やあわれ

兵隊の死ぬるやあわれ

遠い他国でひよんと死ぬるや

だまつてだれもいないところで

ひよんと死ぬるや



「愚の旗」の企画、編集をされた人と知り合うこともできた。ごく最近、新たに発見された二詩をおさめた、竹内浩三全作品集「日本が見えない」(藤原書店)も刊行された。これは日記も詩も全部載つていてすごい本だが、八八〇〇円と高価である。

もちろん、

彼の詩は、

戦争をう

たつたもの

ばかりでは

ない。その

作品の多く

には、生来

のユーモ

ア、光向

性、そし

て、どんな

状況にあつ

ても本当の

物を探し出

す事ができ

る曇りない天才の目がある。反戦の象徴のように引き合いに出される事もあるけれど、彼はたまたまあの時代の産まれ落ちてしまっただけで、自分の目の前の現実と向き合いながら、大好きな物書きに励んでいただけのことだろう。生きていればどんなに面白いものを創り続けただろうとそれだけが悔やまれる。

「愚の旗」には、詩だけではなく、日記や書簡、小説や随筆もいくつかおさめられていて、どれも人間的な味がある。母親代わりだった姉に生まれた姪に、部隊から宛てた短い手紙。これが素晴らしい。何しろ生まれたばかりの赤ん坊に宛てているのだ。「人間のたつた一つのつとめは、生きることであるから、そのつとめをはたせ」と。

参考までに、竹内浩三とその作品を紹介しているホームページのアドレスを。作り自体はやや読み辛い部分もあるが、誠実に作られているページである。ここで、まずはその作品に触れて見て欲しい。

(長井理佳)

<http://isweb21.infoseek.co.jp/novel/tkoko/>



ドグマ (Dogma)

1999年公開(アメリカ)

ビデオ・DVD: 東宝ビデオ

監督・脚本・編集・出演: ケヴィン・スミス

出演: リンダ・フィオレンティーノ、アラン・リックマン、サルマ・ハエック、ジェイソン・リー、ジェイソン・ミューズ、クリス・ロフク、ベン・アフレック



「ドグマ」を辞書で引いてみると、(キリスト教の)教理・教義・信条などなどと説明されている。誰にでも何となく苦手な言葉というのがあろう。私の場合、この「ドグマ」が苦手なものひとつである。耳にするたびに居心地の悪さを感じるのになぜだろう。

サンダンス出身のケヴィン・スミスの、私の苦手な語をタイトルを持つこの映画、確かに、キリスト教の知識があつたほうが楽しめるかもしれない。そればかりか、様々な映画に関する知識、あるいは、会話を楽しむ英語力、そんなものもあつたほうがいいような気がする。ゴージャスなブロード美人(時代錯誤たなあ)が出てくるわけでも、不可能を可能にしてしまうような強引なヒーローが出てくるでもない。そんな映画であるにもかかわらず、ちよつと観てみてよ、と親しい友だちに薦めてみたくなつてしまった。

神に背いて地上に落とされた二人組の天使の企みと、有耶無耶のうちに、それに対抗することを余儀なくされたキリストの遠い遠い末裔。うーむ、設定からして強引である。確かに、相当に強引な部分が多々あるものの、神やその創造した世界つもの土台はかなりしっかりしているし、それに対する下らなさを塗し方も度を心得ている。そうは言っても、基本的にはどたばたのはちやめちや。ただ、端々に気になる台詞、気になる場面が、鏝められ、笑いながらも、ちよつと考えずにはいられないような、妙な風味だ。

神の存在、キリスト教のあり方など、直接的に批判することはないけれど、結果的には、なかなかどうして立派な批評となつている。アメリカという国で制作されたことを考えると、ケヴィン・スミス、ただものではないかもしれない。

(全王)

ヤンヒポちつく

昨今、組織改編が相次ぎ、筆者の周りも慌ただしく環境が変化している。しかしながら信念とか理念というのは変わらない方が美しいと思う今日この頃なのである。

さてさて、変わらないものが有る反面、変りやすいのは女心と秋の空だろう。その女性心理をどうやって把握し導くかにより日々の生活をより豊かにも貧しくもなるらしい。ある人物から聞き及んだ対人原(人間)へのコミュニケーション方法を学んでみたい。

解りやすくするために有る程度人物と背景の設定をしよう。年齢は三〇代半ばの男性で、仕事はサラリーマンではなく自分の時間を自身で作る事ができる。また、外観はスポーツマンタイプなのが、少し派手目な成りを好み、それなりにハイセンスを装っている。収入についても、年二回ぐらいは海外旅行へも出かけ、食事のレベルは高い方。育ちも中の上なので味覚もそれなりに洗練されている。一番

重要な性格だが人当たりが良く愛想も良い。ただ、性根は悪魔に魂を売つてしまつたらしい。もちろん外見からは一切判断つかないが、。また、一見強面に見えるケースもあるらしい。こういう風に書くとは現実離れしているかもしれないが、読者の皆様には勘弁して欲しい。以上の彼がどういつた推移で女性と接するかを検証しよう。因に名前はSatanaという事にしよう。

・二六才OL M子(甲信地方出身の場合)

普通OLというのは職種にもよるが仕事に命をかけているタイプと単に収入の為のみと割り切つているタイプと別れる。二〇代半ばぐらいまでだと仕事以外にも忙しいので馬車馬のように働いている者は少ない。また、職場にもより多少の差違は有るにせよ付き合つている男性が居ないケースは少ない。もし居ない場合は人格なり環境なりに問題が有ると考えた方が良い。そういうM子と知り合う場として一番多いのはいわゆる合コンだ。M子も彼氏はいるのだが、たまには全く知らない異性と話してみる事には抵抗を感じない。これが、一対一だと彼氏にも負い目が生まれるのだが、グループであれば責任転嫁

は容易いのだ。また、実家は遠いので必然的に一人暮らしなので行動自体も自由奔放な振るまいにも慣れてる。こういったタレの特徴としては、年収自体は低いので自活道は非常に厳しい。当然、なにがしかの副収入を考えている。いわゆるアルバイトだ。しかし、自分というものを持つていこうという幻想をいただいてるので、あまり無茶な事はしない。泥沼にハマツるのも怖いと感じている。しかし、ブランドなどを持つ



ていないと安心できない見栄もかなり持つている。結婚については三高を真剣に望んでいるが現実には厳しい事も解つていて妥協するつもりでもない。多分、こんなヤツに思い当たる輩も多いだろう。そこで本題だが、前述した合コンで初めて出会い、通常の挨拶を済ませたら、S氏はまず冷静に相手の話を聞く。話の節々に本人の嗜好が多々含まれていて、その後の会話の糸口になる。M子は住宅環境に大変感心を寄せている。また、母親は苦勞人だが料理の才能を認めており、自分にもその才能が受け継がれていると信じている。そういう話で世間話から伺い取る事ができれば、その後は自分の境遇を少し落としてM子に優越感をほんの少しだけ味わわせるのだ。すると魔法のようにM子の警戒心が消えて行く。しかし、こんな事で完全に警戒心を解くようだと、お箱が知れるので二割ぐらいの警戒心は残しておいて欲しいものだ。その次の段階では、兎に角励まし続けるのだ。なんでもよい。普通の社会人は大なり小なり矛盾に気がつき初め、折り合いを付けて行く。そんな中であつては、励ますと喜ぶという簡単な図式に必ずまはまるのだ。励まして警戒心を抱くようであれば、過去の経験に多大な難があると思つて間違いない。そんなタイプでOLに甘んじているようなら危険なので近寄るのは止そう。M子も例に漏れず、励ますとだんだんその気になつてくるのが手に取るように解る。グループでの懇談の場合はここまでで終わらせよう。これ以上押しでも相手にブレーキをかけてしまうので逆効果というものだ。兎に角、その場では連絡先だけ押さえておき、相手にクールダウンする時間を与えるのだ。次に呼び出す場合も万が一彼氏に知れても言い訳がたつように話をでつち上げる必要がある。ただ、間違つても「彼氏がいるのは解つていますが...」などと言つてはイケナイ。そんな話題には一切触れずに、話の方向だけで彼氏にウソをつかせるように仕向けるのだ。一度ウソをつかせれば後は雪崩のようにウソをつき続けるしかないのだ。ただ、極端な事を言わせると辻褄が合わなくなるのが早いので、なれべくチャチなウソが良い。小さいウソも沢山つくと本人にとっては本当だと勘違いするし正直に打ち明けて許しを請う事も不可能になるのだ。しかし、実際ウソを付くのはタレ本人なのでS氏が罪悪感を覚える必要は全くない。



長井理佳

『キイチ』

少し、涼しい日でした。

「あそこで、本でもよもつかな。」
と、マリコは思いました。

庭の、西側のすみっこには、キイチコの茂みがあり、そこはマリコのひみつぼしよ」でした。といっても、別にひみつをかくす相手がいるわけではなかったのですがね。「おたのしみのぼしよ」でもいったところでしょうが。

「このキイチコは、場所がいいのか、あまづっぱいおいしい実をどんどんらせるのです。夜のうちに誰かが魔法をかけて、ふやしているのではと思うほどでした。

「スーちゃん、ハッパになら教えてもいいな、あ、あ、ゆきちゃんにも。」

ゆきちゃんというのは、こつちへきてから仲良しになった友達です。このあたりの子供は、海のそばのせいか、気が強くてはつきりものをいっ子が多くて、新入りのマリコはときどきまじまじして

しまうのですが、ゆきちゃんは、とてもおだやかで、いつもそれとなくマリコをかばってくれるのでした。それに、この前は、

「うち、うさぎがあかちゃんをうんだの。見せてあげる。」

と、いって、マリコだけを呼んでそっと見せてくれました。うさぎのあかちゃんはまだ小さすぎて、だっこすることは出来ませんでした。

「すこし大きくなったら、マリコちゃんにいつびきあげようか。」

と、ゆきちゃんはいいました。マリコは、ちっちゃなかわいいうさぎを家にも持てると思っただけで、うれしくて笑い出しそうでした。

でも、その日、マリコがひみつのぼしよ」で、いつものように、二つ三つ、つまもつと行ってみると、そこには、もつたれかが来ていました。いえ、「来ていた」というよりも、もう一〇年も前からそこにいますというふうな顔で、一匹

きの黒猫がお店を出していたのです。「くるね」といって、うまいふうななまじな、何ともふうりゆうな字のかんば

んが出ています。

「ううじやませ。」

黒猫は、レモン色のバラの花のまよりのエプロンに手をあてて、ていねいにおじぎをしました。エプロンは、黒猫にとてもよく似合っていました。

「こつちやになさいませるか？」

「えっ、ええと、紅茶は、あんまり……。」

マリコが思わずそういうと、黒猫は、きゅっと金色の目でマリコを見て、いいました。

「うちは、こつちやしかごいませせん。」

「あ、すみません。それならこつちやにします。」

マリコは、そう答えてしまったから、ちよつとむっとしました。

「こつちやになさいませぬ。それでは、ただいまお待ちします。」

黒猫は、とたんに、にやっとした笑い顔になり、しげみのなかに消えました。

キイチコの茂みの前には、小さな丸いテーブルと、木のいす。それは、とてもかわいらしくてりっぱなものでした。どちらも、ふちに、キイチコのはっぱのもようがぐるりとほってありました。

茂みの中からは、ときどき、かちやかちやという音や、しゅーしゅーとお湯のわくような音がしていました。やがて、黒猫が、赤いおぼんに、湯気のたつカップを二つのでせて出て来ました。マリコは、ねこが鼻の頭に汗をかいているのを、初めてみました。

「わたしも、いっぱい、おつきあいさせていただきます。」

黒猫は、にこにこしていました。「お客さまといたたく紅茶は、かくべつ

ですから。」

黒猫がならべたカップとソーサーは、海のように真っ青で、お皿には、キイチコが二つぶすつ、のっています。あたりの緑や、小さなしゃれたテーブルや、とてもきれいなお茶の道具のせいで、マリコは、何だか、一枚の絵の中にいるような気がしたほどでした。

「本日は、ミルクティーでございます。」

あたりは、紅茶のいいかおりでいっぱいです。

「ありがと。」

マリコは、そうとカップを持ち上げて、ミルクティーを一口のみました。

「おいしい。」

お砂糖を入れないで、紅茶をのむのは初めてでしたが、ミルクのほのかな甘みで、もう十分でした。黒猫は、手をひざの上のせて、もじもじしながら、うれしそうにすわっています。

「黒猫さんは、飲まないの？」

マリコは、たずねました。すると、黒猫はいいました。

「わたくし、なにぶん、ねこじたなものですから。」

それから、はーつと残念そうにためいきをつきました。

「一度でいいから、熱いうちにいただいてみたいものでございます。」

やがて、だいぶ冷めたころ、黒猫は、まずひとさじ飲んで熱さを確かめてから、やっつとゆっくりと味わって、満足そうに飲み干しました。

「このつきは、ロシアン・ティーにいたしましよ。」

「ロシアン・ティーって、」

「ジャムをいれて飲む、紅茶です。もちろん、ジャムは、自家製のキイチゴジャムです。」

それにしても、ねこじたなのに、紅茶の好きな猫なんて、そうそういるものではないですね。マリコは、もつと色々なことを聞きたくまりました。

「紅茶のいれかたなんて、どうしておぼえたの？」

すると、黒猫のひとみがぱつとかがやきました。まるで、さつきから話しかったのだけれど、きっかけがなかったというようでした。

「わたしは、その先の角の、花屋の猫なのです。」

「へえっ。」

「花屋といえますのは、きれいなお花を売って、楽しいばかりではありません。

重い物を持たなければならぬし、冬は水が冷たいし、でも、店をあたたかくすると、花がみんなひらいてしまいますから、さむいのも、がまんしなければなりません。」

「ふっん。」

「店の主人は、冬はいつも、仕事がすむと、熱い紅茶を入れるのです。そして、ほんとにおいしそうに、飲むのです。なんといつか、あは、猫が、一日の終わりに、夜明けの月を見ながら、またたびの枝をかじるようなものでしょうかね。」

「へええ。」

「さつきから、マリコは、「ふっん。」とかへええ。」ばかりです。

「かいめしのそんな様子を見ているうちに、わたしもすつきり、紅茶の香りが好きになりましてね。それで、こっそり、



勉強しました。」

黒猫は、なんでもないように言いましたが、ひげが、得意そうにびんびん動きました。

「勉強って？」

「はい。台所で、紅茶の入れ方をじっと見ていたり、たくさん本を読んだり。」

「本なら、私も好き！でも、どこで本を読んだの？」

すると、黒猫は、エプロンのポケットから、一枚のかたいカードを出して見せてくれました。それは、図書館の貸し出しカードでした。名前のところには、「花屋クロ」と書いてありました。

「ほんもの？」

「思わず聞いてしまいそうになって、マリコはあわててのみこみました。とても失礼なことだと気がついたのです。そ

れに、まだマリコは、この街の図書館のカードを持っていないのです。

黒猫は、それから、その後実際に喫茶店で修行をしたことなどを、マリコに話してくれました。

「この青いカップは、修行が終わった時に、店のマスターがわたしにくれたのです。」

黒猫は、しみじみとカップをなでました。

「そして、やっと、ここに念願の店を出すことができるようになりました。お客さんは、来たり来なかったりですけど。」

「だいじょうぶよ、とってもおいしいもの！いつかきつとお友達もつれてくるわ。」

「ありがとうございます。ただ、まだ

カップが二くみしかありませんもので……。」

黒猫は、こまったような、うれしいような顔で、言いました。細い目がますますにゅーっと細くなりました。

最後のひとしずくを飲み干してから、マリコは、はつと気がつきました。

「わたし、お金を持ってないわ！」

黒猫は、いはいえと前足をふって、「いいんです。いいんです。それよまた、おしゃべりをしに来て下さい。わたしの長い話につきあって下さる方はなかなかいないので……。」

「明日も、来ていい？」

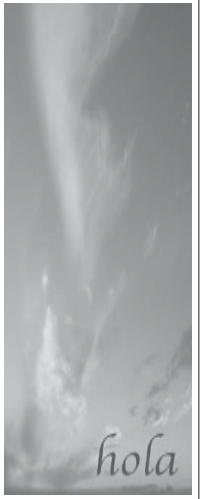
マリコは、たずねました。黒猫の店がすっかり気に入ったのです。明日なら、ゆきちゃんも連れて来られるかも知れません。

「あした……。」

黒猫は、ふつと上を見上げて、風のおいをふんふんと確かめました。そして、ひげを一本ねじると、ぴん！とはじきました。

「わたしの、ひげ予報によりますと、明日から、しばらくは雨ですね。草がすつきり乾いたころ、また店を出しましょう。」

次の日から、黒猫の言った通り、ほんとうに雨になりました。マリコは、かさをさして、キイチゴの茂みをのぞいてみましたが、テーブルも、いすも、湯沸かしも、なんにもありませんでした。ただ、うっすらと、紅茶のいいにおいが残っているだけでした。



四月のバルセロナは、明るく輝いている。木々の淡い緑の葉が柔らかい光りに透きとおっている。木々ざわざわした活気を感じるの、催されているフエアのせいなのか、それともこの街に潜在的なものなのか。どうもこは、よいところのようだ。なんだかわからないけれど、いろいろなものが混ざり合った、ちよつと特別な雰囲気である。空港から、街の中心であるその名もカタルーニャ広場というところに着き、ホテルまで荷物を引いて歩いた短い時間でそんなことを感じたのだから、きつとそうに違いない。

ご存知のようにバルセロナはスペイン第二の都市であり、政治の中心としての首都マドリッドに対して、地中海に開けた商都である。スペイン国家のひとつの州というよりは、寧ろイタリアやフランスから繋がる地中海世界の中心都市なのである。現在もスペインの鉄道網はマドリッドを中心として、南のコルドバやセビリヤとの間には日本の新幹線にあたるアヴェ（AVE）が運転されている。パレンシアの方にも建設が進むそうだが、バルセロナに関しては一向にマドリッドと結ぶという計画がないらしい。

太陽と青空のもと、ガウディやピカソ、ミロやタピエスなどの芸術家たちを生み、フランス語にも近いような独自の言語をもった、独特の文化が重層的な響きを放つ。香料と土埃と塩分が、空気中で攪拌され、強い光を触媒に特別な雰囲気を出しているような気がする。空気の匂いと街の色と音。塩分といえば、ここで飲むミネラルウォーターがいかにもこの場所にあっているように感じられる。ヴィシー・カタランといひ、炭酸を含んだ塩分の少し濃いミネラルウォーターで、歩き回って疲れた身体には実に心地よく水分のみならずさまざまなミネラルを供給してくれる。

バルセロナの街は、縦横に街路が整然と計画さ

れ、建物は四角形のブロックに統一されている。街は三方を丘に囲まれ南を海に向かってひらき、海と川の遠いこそあれ、京都と同じ理想郷の形式をもっている。街全体は、海に向かって傾斜していて、これがまた柔らかな流れをつくりだしているのかもしれない。ヨーロッパの内陸にできた石造りの街とも、北方の港町とも違う、同じ石でできてはいるのだけれど、そんなに堅くはなく、むしろ柔らかな空気と風の流れたようなものを感じる。

街の中心スペイン広場から段々の丘をのぼってゆくと、上の方にバルセロナパビリオンという、バルセロナの市街地図では見落としてしまいうような、小振りな建物がある。

このバルセロナパビリオンという建物は、近代の最も重要な建築家のひとりであるミースファンデルローエによってデザインされた、バルセロナ万博（一九二九年）のときのドイツの展示館である。だから当地バルセロナでは、バルセロナパビリオンではなくドイツ館でなければ通じないのだが、バルセロナパビリオンと呼ばれている。ずっと閉鎖されていたが、何年前かに修復され今見ることができている。そんなに大きくもない平屋建ての建物だけれども、今なおそのデザインは色あせないばかりか、ますます重要性を増しているように思える。

とてもシンプルな水平と垂直の平面だけでできた建築である。抽象的な絵画のようでもあり、建築ら



しからぬ建築である。一切の虚飾が削ぎ落とされている。大小何枚かの壁、というよりは垂直な（空間構成）要素は、建物の空間に流れるような動きをつくりだして、両端に設けられたふたつの水面と伸びやかな長い壁面が、建物がずっと続いてゆくような感覚を与える。とても有名な建築だから、建築を勉強するひとには必ずその名だけでなく図面や写真を見ることがよく抽象的なイメージをもっていた。

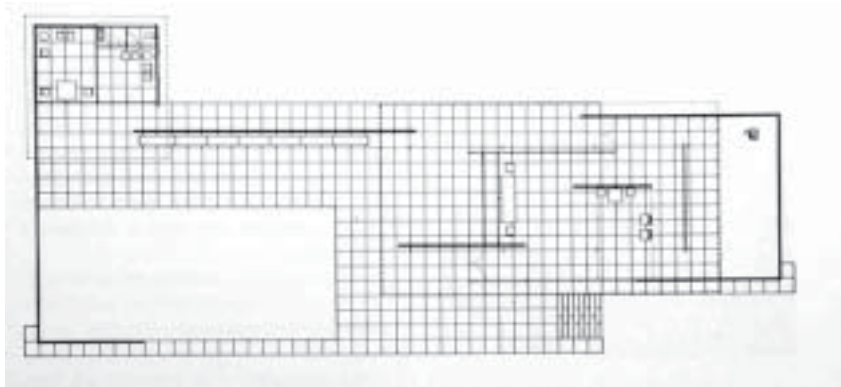
しかしながらはじめて訪れたその建物は、図面や写真から感じたりつくりあげたイメージの産物とは大違いだった。もつとつと具体的なのである。もちろん建築として存在しているのだから具体的なものはあたりまえなのだが、ひとつひとつの材料や部分の深々吟味され、お互いの関係性がとても緊密にできているのである。材料では、例えば壁に使われているオニックスという石の深い緑色や、石を割って広げたときの目（石目：模様）の白い模様とそれのあたるとか、石と石を組み合わせるディテール。柱に取付けられているクロームメッキしたカバールのきらきらする光沢や十字形をしたその平面などなど、そして深紅のベルベットのカートン。実際に歩いてみると、空間ははるかに強弱をもつて流れるようであり、建物の両端に設けられた水面には、周囲のトラパーチン（大理石の一種）の赤い色や、光が映りこみ、小さなさざなみが空間の広がりを強調しているかのようであった。単なる抽象的な全体像ではなく、幾重にも掘り下げられたひとつひとつのモノが固有の意味を表現しているようだった。

しかも、それがまたかなりな濃密さで迫ってきて、エロチックですらある。

建物の外には、スペイン国旗ではなく、カタルーニャの旗が風にたなびいている。濃いブルーと黄金色と深紅のストライプ。紅い四本の線は、爪でかいた血の痕跡だそう。ここはバルセロナなのだと思いためて思う。

この都市をはじめ訪れたのは学生の時だったからもう十七、八年近くもたつことになる。まさか将来仕事で来ることになると思ってもよらず、一日二千五百円くらいの予算で一夏かけてヨーロッパ中をあるきまわったものだ。果たしてその時のバルセロナの印象といえば、もちろんガウディも見たしその教会の彫刻に圧倒されもし、ピカソも見たのだが、

街そのものからどれほどのインパクトを受けたかというところでもなかった。芸術の片りんは感じるとも、街そのものから深い魅力などというものはほど遠い印象しか残っていない。九二年のバルセロナオリンピックを契機に随分変貌したとも聞か、はるか以前より重なる都市の魅力を感じられなかったのは、こちら側にそれだけのものが備わっていたからだろうかと思うしかない。よく憶えているのは、モンジュイクの丘の上、ミロの美術館へゆく道がきつかったこと、その丘ふもとにあるパールのような店先で、鳥がくるくるとあぶられてまわっていた光景と、それがおいしかったこと。そして、イタリアへ向かう夜汽車を待っている間に、駅のホームで、年配の日本人の旅行者に分けてもらった干物がこの上なくおいしかったことくらいである。（篠崎健一）



よくわかる悪の枢軸

I Know Your True Nature

アメリカの大統領は、年の初めに一般教書演説(State of the Union)というのを議会ですることになっている。日本で言えば、総理大臣による施政方針演説にあたる。今年のブッシュ大統領による一般教書演説は、何と云っても「悪の枢軸(axis of evil)」に尽きるだろう。今やブッシュといえば、「悪の枢軸！」って言っちゃったやつ、の感さもある。そこで、大統領が悪の枢軸をどう語ったのか、ここに詳しく紹介してみる。

大統領は、とにかく自信に満ちている。

「悪の枢軸」は、演説の序盤に、ふたつの国家目標を掲げる下りに現れる。以下はその要旨である。

われわれはふたつの偉大な目標に向かって前進する。ひとつは、テロリストどもを壊滅させ、法の裁きを受けさせることだ。

いまいち、テロの恐怖に怯えちゃってる国もあるようだが、

間違えるなよ。彼らがやらないなら、アメリカがやる。

Make no mistake: If they do not act, America will.

われわれの二つめのゴールは、化学、生物、そして核兵器をもってアメリカと世界の脅威となっているテロリスト国家を叩き潰すことだ。連中、「9月11日」以来ずいぶん静かにしてるようだが、

われわれにはやつらの本性はわかっている。But we know their true nature.

北朝鮮は、国民を飢えさせておきながら、大量破壊兵器で武装に余念がない。

イランは、選挙によらない少数の抑圧者が国民の自由を縛りつつ、兵器とテロの輸出に余念がない。

イラクは相変わらずアメリカに敵意むき出して、テロ支援に余念がない。炭素菌、神経ガス、核兵器。自国民を毒ガスの実験台にしつつ、国際的な査察団は追い出してしまった。

これこそ、文明世界から何かを隠している体制である。

This is a regime that has something to hide from the civilized world.

こういう国家やそのテロリスト仲間たちは、**悪の枢軸**を構成し、世界の平和を脅かそうとしているのだ。

States like these, and their terrorist allies, constitute an **axis of evil**, bent on threatening the peace of the world.

とこんな感じでまだまだ続いていくのだが、とにかく全編通して威勢がいい。しかし、それにしても困るのが、脅しにも似た各国に対する「対悪の枢軸連合への参加の勧め」である。

やつらはわれわれの同盟国に攻撃を仕掛けるかもしれない。あるいは合衆国を恐喝しようとしているのかもしれない。なににせよ、無関心の代償は破局を招くこととなる。

The price of indifference would be catastrophic.

すべての国は知るべきである。

アメリカは、わが国家の安全を保証するため必要なことを行う。

America will do what is necessary to ensure our nation's security.

「すべての国」ってことは、わが日本も入ってるんだらうなあ。

そういえば、思い出すことがある。イギリスにいたときのこと。下宿先の大家さんの同居人で自称映画監督のインド人、サムがあるとき友人のアメリカ人夫妻を夕食に招いた。御主人は米国ゼロックスの重役なる紳士であった。サムがそう紹介した。

ちょうどその直前までわが母が彼地を訪れており、食後の話題のひとつに上った。

「いやあ、うちの母親も冒険心旺盛って言うか、はじめての海外なのに、一人でどこにでもいっちゃうんですよ」

「はあ？で、君はお母さんに付きあってはあげなかったのかい？」

「五日間いたんですが、一日は一人でしたいようにさせました」

「それは良くないんじゃないかな」

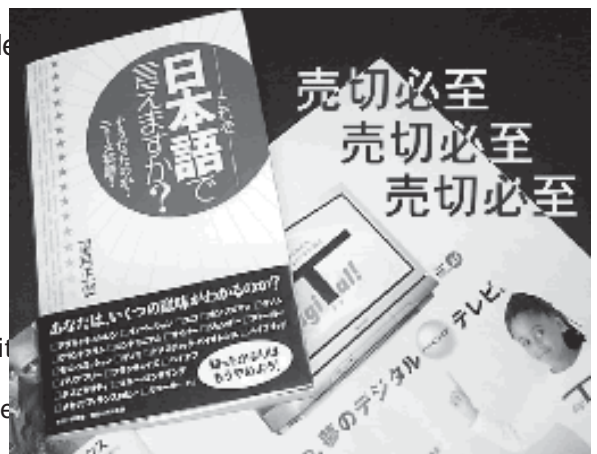
“It doesn't sound nice.”

四六時中いっしょにいてあげて当たり前だというのである。いいじゃないか、私たちには私たちのやり方がある。そう言っても聞き入れてはもらえず、アメリカ式家族の絆を少々説教されたのであった。

放っといってくれ。

そういう個人的な経験から、私は以下のサダム・フセインの文句ににやけてしまうのである。

「イラクの体制転覆という米国のスローガンを支持する。軍事攻撃で人民や資源を破壊されるよりまだから」(Feb 22 2002) (望月)



まったりして、折角の食事が気まづくなってしまう。固着観念にはろくなことがない、というひとつの見本ではある。

私の味噌汁に対する狭窄した視点は社会に重大な影響を与えるわけではないので、大した問題ではないだろう。けれども、例えば、コペルニクスの地動説、ラマルクやダーウインの進化論、全日本女子プロレスの阿部四郎、一九七〇年代のオランダのトータル・フットボール、ケージの四分三三秒を考えてみたまえ。世界の見かたを根本的に変えざるを得ないような発見が生まれるところには、固着観念の超克があることは間違いない。

いつの時代にも、どこの世界にもそのような革命的な発想を生み出す人々はいらぬものだ。そんな発想が科学や文化を押し進めたり引き戻したり。近頃の日本でも、そんな事例にいくつか出会うことがある。国会議員は国民のために滅私する存在であるはずだが、国民を自分のために使役するという国会議員がいる。国民が犠牲にならないよ

(二面から続く)

うに牛肉の買い上げ制度ができたのに、国民を喰い物にするためにそれを利用する企業がある。犯罪を取り締まる組織であるはずなのに、組織ぐるみで犯罪に手を染める警察がある。開いた口が塞がらないほどの、まさにコペルニクスの転回だ。彼らが一種の天才的発想の持ち主であることは間違いない。うーむ。

こんな例を挙げていると、私が確認したかった「固着観念に囚われてはいけぬ」という説得が、汚泥塗れの、ありがたくないもののように思えてきてしまうけれど、いやいや、本当に重要な問題なのである。あなたが歴史に残るような人物になりたかったら、まず、当然のこととして機械的に受け入れてしまっている諸々の事柄を疑ってみることが必要だ。人々が思いもよらぬ逆転の視点を持てたなら、きっとあなたは史に残る人物となるだろう、善きもの、悪しきもの、どちらの側にせよ。

(全太)



Ken-ichi Shinozaki, architect

4-3-44-1 Narita-higashi, Suginami-ku,
Tokyo 166-0015,
Voice : +81-3-3220-0644
Facsimile : +81-3-3220-0640;
e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp

篠崎健一アトリエ

ワイヤード・ワールド ～ 国境を越える音楽 Wired World - Borderless Music

Apple□ User□ Groupを代表してじょじ伊東が出演

3月22日 13:00-13:40

東京ビッグサイトで行なわれる

Macworld□ Tokyo□ 2002プレゼンテーションシアターにて

演劇・TV・CMなどで活躍するじょじ伊東が、今回は音楽で世界平和を表現する。

余談だが、じょじ伊東はあまりの遅筆のため、かつてからす新聞の連載を打ち切られたという経歴の持ち主である。

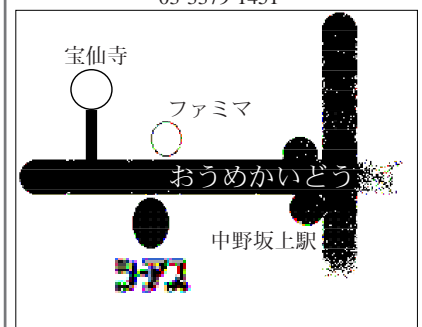
万年筆なら dani

<http://danijapan.com/>

1クラス4人までの少人数制学習塾

ファミマ

中野区本町2-50-12 ドエル中野201号
03-3379-1451



編集後記
からす新聞第二巻第一号(通巻第三七号)、無事、発刊できました。
新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。
次号発刊予定日は二〇〇二年二月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。